

今年2月からの電子連絡帳への移行に伴い、これまで保育室のスケッチブック等でお伝えしていた写真付きの記録を、それぞれのご家庭に送ることができるようになりました。おうちの方々からも「文字ばかりの記録よりも、写真付きなので園での様子がよくわかり、家庭での家族の会話が増えました」とうれしいお言葉を頂いています。

これに伴い、今後は、紙面による「からたちだより」内の「すすく」「きらきら」のページについては、電子連絡帳と重複する内容が多くなってしまいますので、日々の電子連絡帳の方をご覧頂ければと思います。

「成長の物語」配布について

さて、昨年に続いて、今年度も新型コロナウイルスの影響で「劇場ごっこ」や「作品展」を、おうちの方々に見に来ていただくことが出来ません。そこで、それらの代わりに「成長の物語」という冊子を作成しました。

「劇場ごっこ」や「作品展」は、他園では「生活発表会」と呼ばれることもありますが、これらの行事の目的は、「この1年を通して、子どもたちはこのように成長しました」ということをおうちの方々と一緒に振り返る機会だと考えています。ですから、今年の子どもの成長の様子をおうちの方々にどのようにお伝えしようかと職員で考えた結果、この「成長の物語」という冊子を作ろうということになったのです。

これは、ニュージーランドのテファリキ(※)の柱として取り組まれている「ラーニングストーリー(学びの物語)」が基になっています。次年度以降は、「からたち版ラーニングストーリー」として、子どもたち一人ひとりの成長(学び)の物語を作成していくつもりです。

(※) テファリキとは、1996年にニュージーランドで導入された幼児教育のカリキュラムです。読み書きや運動、「〇才までに〇〇ができるように」といった日本によくある幼児教育とは違い、子どもの社会的・文化的な学びや、さまざまな人々との関わりを重視しています。また、集団活動を強制せず、一人ひとりの子どもの意思を尊重するのも特徴。テファリキでは自由遊びがメインです。おままごとができるスペース、動物の飼育ができるスペース、釘や金づちを使って大工さん遊びができるスペースなど、さまざまな遊びの空間があり、子どもたちはそれぞれ好きな場所で好きなように、思いっきり遊びながら「自分で考えていくプロセス」を習得していきます。(「こどもまなび☆ラボ」のHPより)

「ラーニングストーリー(学びの物語)」とは、子どもが成長していく姿をその子自身のストーリー(物語)として捉えて、大人が教えて身につけさせたことではなく、子ども自身が、何を学んだのかを記録していくものです。子どもを「できる」「できない」という目で見たり、「目標が達成できたかどうか」といった価値づけをするのではなく、子ども自身の興味や関心がどこにあるのか、どんな気持ちで取り組んでいるのかなどに目を向け、肯定的に捉えていこうとするのが特徴です。このように書いてしまうと難しく聞こえるかもしれませんが、要は、「子どもってなんでこんなことをするんだろう？おもしろいなあ！」と思う場面をたくさん見つけて写真とともに記録に残していくことだと思っています。

大人から見ると、子どもたちはただ遊んでいるだけのように見えるかもしれませんが、実は、常に何かを学んでいるのです。大人は、「遊び」・「学び」・「いたずら」などと分類しがちですが、当の子どもたちにとってはどれも同じことなのです。大人にはわからないことも多いかもしれませんが、子どもたちにとっては、とても価値のある学びなのだと思います。

その「子ども自身にとって価値のある学びを丁寧に捉えていこう」というのがこの取り組みです。月に1～2枚ずつ個人のそうした記録を残し、個人のファイルに綴じていきます。またそのファイルは、子ども自身でも、おうちの方々も、職員も常に見ることができるようにしておいて、時々、自分の成長の物語を振り返ったり、それをもとに誰かと会話を楽しんだりできるようにしていきたいと思っています。

こうした取り組みによって、周りからの子どもたちへのまなざしがより温かなものになり、子どもたちも、それを感じて、自信をもっていろんなことに取り組み、より「自分らしく生きていく力」を身に付けていくことができるのではないかと期待しています。大人も、近くに自分の理解者がいてくれるときは力が湧いてきますよね。

子どもは自ら学び成長していく存在です。私たち大人は、子どもたちを力のない、弱い存在としてみるのではなく、自ら学び成長していこうとする力を生まれながらにもっている一人の人間として、共に社会をつくり、共に生きていく存在としてかかわっていきたいと考えています。